トマス・アクィナス『「魂について」註解』第三巻第七章　試訳

石田隆太・高石憲明

はじめに

本稿は、トマス・アクィナスの『「魂について」註解』第三巻第七章の試訳であり、これ以前の試訳[1]に続くものである。凡例についても前稿を参照されたい。

この第七章においてトマスが想定している議論構造は次の通りである。

【第一段階】四三一b二〇～
感覚と知性の諸規定にもとづく魂の本性の解明。
古代人の言っていたこととそれとは異なる理解の提示。
魂は何らかの仕方ではすべてであることに関する古代人の理解の提示。b二〇～
古代人とは異なる理解の提示。b二八～
知性の感覚に対する依存の提示。四三二a三～
【第二段階】四三一b二八～
古代人の理解とは異なる仕方で魂がすべてであることを示す。b二八～
【第三段階】四三二a三～
知性は感覚を要することの提示。a三～
知性が、感覚に依存する表象とは異なることの提示。a一〇～
【第四段階】四三二a一〇～
表象と知性の違いの提示。
複合と分割という知性の作用に関して。a一〇～
最初の知解されたことごととの違いに関して。a一二～

【全体構造】
感覚と知性の諸規定にもとづく魂の本性の解明。
古代人の言っていたこととそれとは異なる理解の提示。
魂は何らかの仕方ではすべてであることに関する古代人の理解の提示。b二〇～
古代人とは異なる理解の提示。b二八～
知性の感覚に対する依存の提示。四三二a三～
知性が、感覚に依存する表象とは異なることの提示。

複合と分割という知性の作用に関して。a一〇〜
最初の知解されたことごととの違いに関して。a一二〜

各議論の詳細については試訳の本文に譲ることにしたい。

なおトマスの註解には、第三段階と第四段階に関する註釈のあいだにアヴィセンナ（イブン・シーナー）に対する批判を述べる部分が挿入されていることも付け加えておこう。実際にアヴィセンナがそう明言しているかはさておき、少なくともトマスが理解するアヴィセンナによれば、知性は知を一度獲得すると感覚を必要としない。これに対してトマスは、観照するためには表象像を使用する必要があること、器官の損傷があるとすでに獲得した知を使用することができないことを理由にしてアヴィセンナを批判する。この点は特に、単なる逐語的な註解に留まらない部分だと言える。

他には、アリストテレスが「手は諸器官の器官」だと言っている箇所をめぐって、トマスが人間の手に備えられた機能ないし目的について言及している部分も存在する。この部分も源泉をたどればやはりアリストテレスの動物学著作《『動物の諸部分について』》に由来をもつと言えるが、他の動物とは異なり人間の手が果たすだろう役割についてトマスがどう考えていたのかを窺うこともできる。身体との関連においても知性的魂の本性が解明されていくことになる。

なお本稿は、下訳を石田が作成した上で訳者二人が検討を加えて作成したものである（文責：石田）。

試訳（第三巻　第七章）

【アリストテレスのテクスト】

四三一ｂ二〇　さて今や、魂について言われたことごとを総括して、あらためて次のように言おう。魂とは何らかの仕方では存在するものすべてである、と。というのも、存在するものとは可感的か可知的であり、ところで、知はたしかに何らかの仕方では知られうるものどもであり、感覚は［何らかの仕方では］可感的なものどもだからである。ところで、こうしたことがどのようであるかを探求しなければならない。したがって知と感覚は、複数の事物に［応じて］切り分けられる。すなわち一方には、可能態にあるところのものどもに対して可能態にあるところのものがあり、他方には、現実態にあるところのものどもに対して現実態にあるところのものがある。ところで、魂のうちの感覚するものと知ることのできるものは可能態ではこうしたものどもである。すなわち一方は知られうるものであり、他方は可感的なものである。四三一ｂ二八　ところで感覚するものと知ることのできるものは、［感覚や知解の対象］そのものであるか［それの］形象でなければならない。そうすると、まずそれらは［感覚や知解の対象］

そのものではない。というのも、魂においてあるのは石ではなくて形象だからである。かくして魂は手のようである。実際、手は諸器官の器官であり、知性は諸々の［可知的］形象の形象であり、感覚は諸々の可感的形象の形象である。

四三二ａ三　ところでまた、可感的なものどもが分離されているように見えるというようにして事物が諸々の大きさなしに存在することは全くないのだから、可知的なものども、抽象によって言われるものども、何であれ可感的なものどもの性向や状態［passio］は諸々の可感的形象においてある。そしてこのことのゆえにまた必ず、何も感覚しないものはたしかに何も学ばないし知解しない。むしろ観照するときは、何らかの表象像を観照するのでもなければならない。ところで諸表象像は、質料なしにあるということを除けば、可感的なものと同様である。

四三二ａ一〇　ところで、表象は［肯定］言明や否定［言明］とは別物である。というのも、知解されたことごとの複合は真であったり偽であったりするからである。

四三二ａ一二　ところで最初の知解されたことごとは、表象像ではないものとしてどの点において異なるのだろうか。他の知解されることごとも表象像ではないが、表象像なしにあるのではない。

【トマスの註解】

〈四三一ｂ二〇〉「さて今や、魂について」［*Nunc autem de anima*］云々。哲学者アリストテレスは、感覚と知性について規定した後で、両者について規定されていることごとによって魂の本性について知られるべきことを示す。そして二つの部分に分かれる。彼は第一の部分では、魂の本性が何らかの仕方では古代人たちが信じていた通りであり、何らかの仕方ではそれとは異なることを示す。第二の部分では、知性の感覚に対する依存を示す。それは「ところでまた、事物は云々だから」［*Quoniam autem neque res*］［四三二ａ三］という箇所である。第一のことをめぐって彼は二つのことを行う。第一に、古代人たちが言っていたように、魂は何らかの仕方ではすべてであることを示す。第二に、彼らが言っていたのとは別の仕方ですべてであることを示す。それは「ところで云々でなければならない」［*Necesse est autem*］［四三一ｂ二八］という箇所である。

それゆえ、第一に彼が言うことには、「今や、魂について言われ」ていることごとを「総括して」［*nunc recapitulantes dicta de anima*］、結果的にこれらのことから提起を示すようにして、「次のように言おう。魂とは何らかの仕方ではすべてである、と」［*dicamus quod anima quodam modo est omnia*］。というのも、「存在するもの」とはすべて「可感的か可知的」であり［*que sunt aut sensibilia aut intelligibilia*］、ところで、魂には感覚と知性ないし知があるのだから魂は何らかの仕方では可感的なものどもでもあるし可知的なものどもでもあり、「何らかの仕方では」［*quodam*

modo〕「感覚」〔*sensus*〕は「可感的なものども」〔*sensibilia*〕そのものであり、知性は可知的なものどもであり、あるいは「知〔*sciencia*〕は「知られうるものども」〔*scibilia*〕だからである。そして「こうしたことがどのようであるかを探求しなければならない」〔*qualiter hoc sit, oportet inquirere*〕。実際、「感覚と知」は「それぞれの事物に」〔*sensus et sciencia in res*〕〔応じて〕分けられる。すなわち、それぞれの事物のあり方に即して、現実態と可能態に分けられる。ただし、「可能態」においてある「ところの」〔*que potencia*〕知および感覚は「可能態」において「あるところの」〔*que sunt potencia*〕知られうるものどもおよび可感的なものどもに関わるのに対して、「現実態」においてある「ところの」〔*que actu*〕知および感覚は「現実態」において「あるところの」〔*que sunt actu*〕知られうるものどもおよび可感的なものどもに対して秩序づけられる。しかしやはり、異なる仕方による。すなわち、現実態における感覚と現実態における知ないし知性は現実態においても知られうるものどもや可感的なものどもであるが、「魂のうちの」〔*anime*〕感覚能力「と知ることのできるもの」〔*et quod scire potest*〕、すなわち知性能力は、可感的なものないし知られうるものそのものではないが、それらに対する可能態においてある。すなわち感覚するものは「可感的なもの」〔*sensibile*〕に対する一方で、知ることのできるものは「知られうるもの」〔*scibile*〕に対する。したがって、魂は何らかの仕方ではすべてであるということしかない。

〈四三一一b二八〉次いで、「ところで云々でなければならない」〔*Necesse est autem*〕と言う際、古代人たちが措定していたのとは別の仕方で魂がすべてであることを示す。そして彼が言うことには、もし魂がすべてであるなら、それは、エンペドクレス(2)の措定したように私たちが土によって土を認識し、水によって水を認識するなどといったように可感的および知られうる諸事物そのものである「か」〔*aut*〕、それらの「形象」〔*species*〕であるの「でなければならない」〔*necesse est*〕。ところで、魂は彼らが措定したように諸事物そのものではない。なぜなら、「魂においてあるのは石ではなくて」石の「形象」だからである〔*lapis non est in anima, set species*〕。そしてこうした仕方で、現実態における知性は現実態において知解されるものそのものだと言われるのであり、それは知解されるものの形象が現実態における知性の形象であるかぎりでのことである。こうしたことから明らかなことには、魂は手に類同化される。「実際、手は諸器官の器官」〔*manus enim organum organorum*〕である。なぜなら諸々の手は、防御や攻撃や保護〔*cooperimentum*〕のために他の動物たちに与えられている器官すべての代わりに人間に与えられているからである。実際、人間は防御、攻撃、保護を自身の手で準備する(3)。同様に魂も、あらゆる形相の代わりに人間に対して与えられている。その結果として人間は何らかの仕方で有全体〔totum ens〕であり、

それは、人間の魂があらゆる形相を受容するものであるかぎりで人間が魂に即しては何らかの仕方ですべてであるかぎりでのことである。というのは、知性はあらゆる可知的形相を受容する何らかの形相であり、感覚はあらゆる「可感的」〔*sensibilium*〕形相を受容する何らかの形相だからである。

〈四三二a三〉次いで、「ところでまた、事物が云々ではないのだから」〔*Quoniam autem neque res*〕と言うのはなぜかといえば、感覚が可感的なものどもであるようにして知性は何らかの仕方では可知的なものどもであると彼は言っていたので、知性は感覚に依存しないと誰かは信じえただろうし、もしプラトン主義者たちが措定したように私たちの知性の可知的なものどもが可感的なものどもから存在に即して分離されているなら、実際にこれが真だっただろう。そのようなわけで彼はここで知性は感覚を要するということを示し、その後には知性が、やはり感覚に依存する表象とは異なることを示す。それは「ところで、表象は」〔*Est autem fantasia*〕〔四三二a一〇〕という箇所である。

それゆえ、第一に彼が言うことには、「可感的なものどもが」相互に「分離されているように見えるというようにして」〔*sicut sensibilia uidentur separata*〕あたかも事物が諸々の大きさから存在に即して分離されているようには、私たちによって知解される「事物」が可感的な「諸々の大きさなしに存在することは全くない」のだから〔*nulla res est preter magnitudines*〕、必然的に私たちの知性の可知的なものどもは存在に即して、「諸々の可感的形象において」〔*in speciebus sensibilibus*〕ある。抽象によって言われるもの、すなわち数学的なものどもだけでなく、「可感的なものどもの性向や状態」〔*habitus et passiones sensibilium*〕である自然的なものどももそうである。そしてこのことのゆえに人間は、感覚なしには新たに知を獲得するというようにして何も学ぶことができず、所有された知を使用するというようにして知解することもできない。むしろ何かを現実態において観照する「ときは」〔*cum*〕、「何らかの表象像を」自身に対して形成するので「も」なければならない〔*simul aliquod fantasma*〕。「ところで諸表象像は」〔*fantasmata autem*〕可感的なものどもの類似であるが、質料なしのものであるという点で可感的なものどもと異なる。というのは、上述〔四二四a一八〜一九〕のように「感覚は質料なしに諸形象を受け入れるものである」一方で、表象とは「現実態に即した感覚による運動」[4]だからである。

さて以上から、知性は知を獲得した後では感覚を要しないとアヴィセンナ[5]が言っていることは明らかに偽である。理由は次の通りである。明白なことに、誰かが知の性向をもっている後になっても、観照するためには表象像を使用しなければならない。そしてこのことのゆえに、すでに獲得された知の使用が器官の損傷によって妨げられる[6]。

〈四三二a一〇〉次いで、「ところで、表象は」〔*Est autem fantasia*〕と言う際、彼は表象と知性の違いを示す。

そして第一には、複合と分割という知性の作用に関わる。彼が言うことには、「表象」〔*fantasia*〕は知性の肯定「や否定」〔*et negatione*〕とは「別物」〔*alterum*〕である。理由は次の通りである。「知解されたことごとの」〔*intellectuum*〕複合においてはすでに「真」や「偽がある」〔*est uerum falsum*〕が、そうしたことは表象においてはない。というのは、真と偽を認識することは知性にのみ属するからである。

〈四三二a一二〉第二には「ところで最初の知解されたことごとは」〔*Primi autem intellectus*〕という箇所で、彼は「最初の知解されたことごと」〔*primi intellectus*〕、すなわち不可分のものどもの諸々の知解、つまり「表象像ではない」〔*non sint fantasmata*〕ものがどの点において異なるかを探求する。そして彼が解答することには、それらは「表象像なしに」ある「のではない」〔*non sine fantasmatibus*〕ものの、やはり表象像ではない。なぜなら、諸表象像は個別的なものどもの類似である一方で、知解されたことごとは個体化する諸条件から抽象された普遍だからである。だから諸表象像は可能態において不可分であるが、現実態においてはそうではない(7)。

注

(1) 『古典古代学』一一（二〇一九）：一一二五、『倫理学』三五（二〇一九）：一五九–七二、『哲学・思想論集』四五（二〇二〇）：一五九–七二、『倫理学』三六（二〇二〇）：一二七–四一、三七（二〇二一）：二三九–五一。

(2) Cf. アリストテレス『魂について』第一巻第二章四〇四b一一〜一四。

(3) Cf. アリストテレス『動物の諸部分について』第四巻第一〇章六八七a六〜b五。

(4) Cf. アリストテレス『魂について』第三巻第七章四三一a一〜二。

(5) Cf. イブン・シーナー『魂について』第五部第六章「誰かが知解対象を知っていると言われるとき、その意味は、いつでもそうしたいときに、その形相を自分自身の心に現前させることのできる状態にあるということ、このことの意味は、いつでもそうしたいときに能動知性に繋がることができ、能動知性からやって来るその知解対象が心のなかに形相化されるということであって、その知解対象がつねにその人の心のなかに現前し、その知性のなかで現実態で形相化されているわけではなく、また学習して、この種の現実態の知性が実現する以前とはちがうということでもある」（木下雄介＝訳、知泉書館、二〇一二年、二八五頁）。

(6) Cf. カルキディウス『プラトン『ティマイオス』註解』第二部第九章（第二三二節）「実際、精神とその熟考を妨害するあらゆる

身体の疾患は、頭においてのみ生じるからである。すなわち、譫妄、忘却、癲癇の発作、狂乱、黒胆汁の炎症は、頭という城砦にその始原をもつが、それによって精神とその熟考が傷つけられ、それゆえより鈍くなるのではなく、病気によって妨害された器官が本性に従って自分の仕事を果たすことや、魂の命令に従うことができなくなるのである。脳の座は、わたしが思うには、いかなる疾患にも耐えることができない。というのも、脳が疾患を感じることで人の死が起こるからである」（土屋睦廣＝訳、京都大学学術出版会、二〇一九年、二八六～八七頁）。

(7) 本稿は、ＪＳＰＳ科研費一八Ｋ一二一九一の助成を受けたものである。

（いしだ・りゅうた　慶應義塾大学文学部訪問研究員
たかいし・のりあき　木更津工業高等専門学校非常勤講師）